維持管理調達の制度改善に向けた課題に関する調査

国土技術政策総合研究所　正会員　駒田　達広，　正会員　岩塚　浩二
八千代エンジニヤリング株式会社　正会員　○野田　一弘，　水野　高志
同上　正会員　畔柳　耕一，　中川　洋介

１．はじめに

近年，「ストック型社会」への転換を推進する必要がある一方で，既存施設の機能保持に必要な維持修繕工事では，入札不調・不落札が数多く発生しており，制度面における問題の洗い出し，改善が急務となっている．

本文では，現時点の維持管理の調達に関する課題や改善策として国外や地方公共団体での取組み事例等について調査し，その結果を受・発注者によるリスク認識や調達におけるリスクの取扱い等の観点から整理し，我が国の現行制度の改善に向けての方向性を整理したものである．

２．調査概要

各種インフラに対して，国内外で包括契約等の取り組みを実施している事例の契約内容について受・発注両者へのインタビュー等により調査を実施した．事例の抽出は，段階的な導入と効果の確認を念頭に置き，①日常管理の効率化事例，②日常管理＋委託期間中の修繕投資の委託事例とした．

適切なリスク移転を図るには，対象となる業務内容に応じて内在するリスクが異なるため，業績と連動させた対価の支払いの仕組みが必要である．欧米等で 10 年以上前からそうした仕組みとして「性能規定型複数年包括業務委託方式」を採用しており，その仕組みとの対比により改善の方向性の整理を試みた．

３．調査結果および考察

３．１　契約要素での整理

国内地方公共団体では，道路施設の維持管理にあたり，JV や組合への発注，複数年契約，業務包括化などに取り組みはじめているが，応急対応業務のみの委託であったり，発注者から依頼があった場合だけ補修を実施するなど，日常管理業務の一部を対象業務とした事例が中心となっている．

一方，下水道や廃棄物処理施設の事例では，性能規定や意思決定も含めた包括的な委託が実施されており，業務内容も更新や投資的修繕を含む事例もある．また，水道法に基づく第三者委託制度は，水道事業者の法的責任を含めて技術上の業務を委託することが可能な制度であり，平成 14 年 4 月に施行され活用されている．

３．２　対象業務での整理

更新や日常管理業務は，実施時期，方法および数量が契約締結段階で概ね決まっている業務である．一方，修繕投資業務は，経年的劣化や機能不足など総合的な評価の下で管理者が意思決定するものであるため，実施時期は決まっておらず，また，実施方法および数量は，実施段階で確定することが合理的である．このように，業務に内在するリスクが異なるため，これに適合した対価の支払い方法（リスク移転方法）が必要である．

３．３　考察

（１）国内道路事例における導入効果と課題

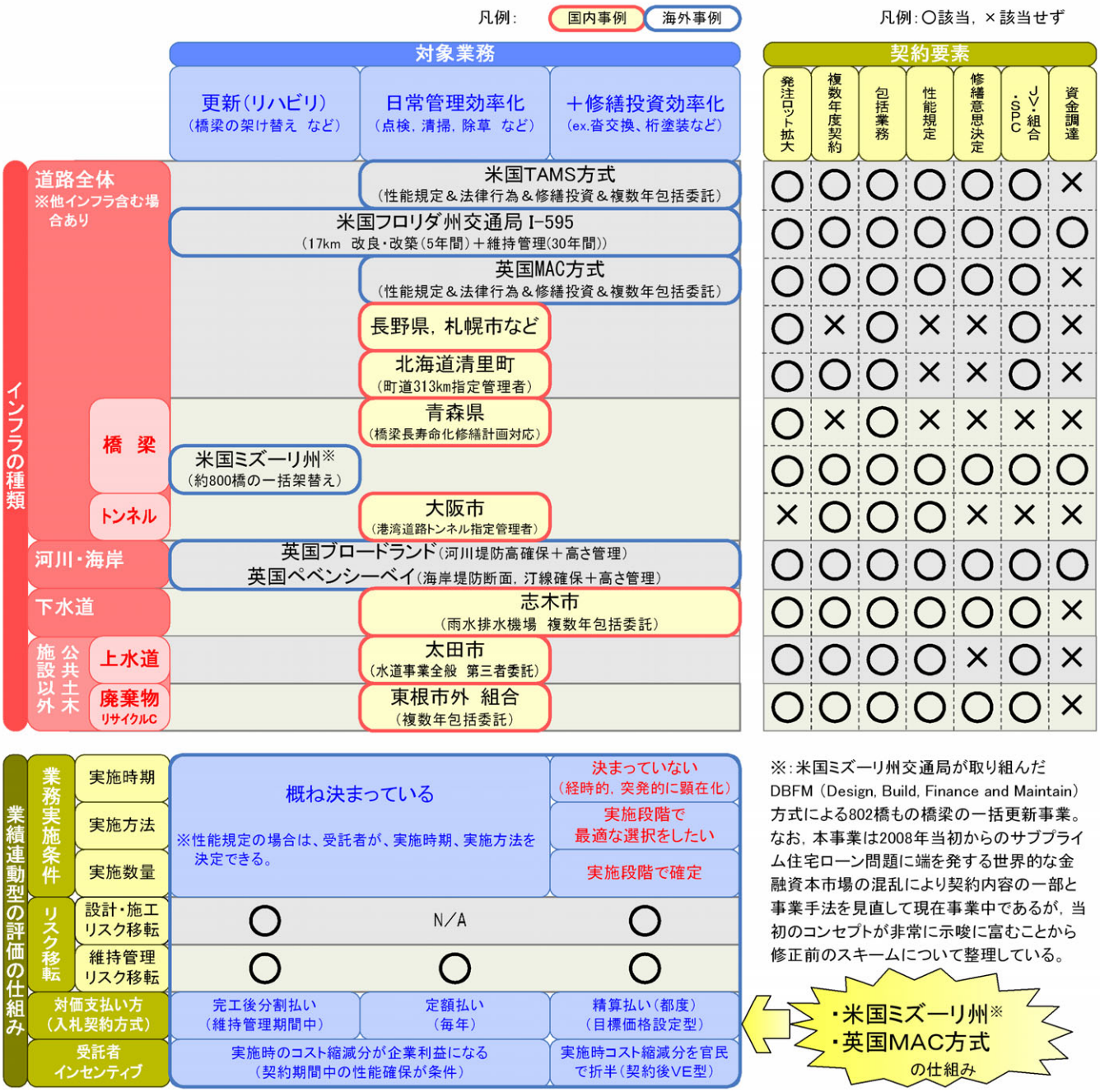
国内道路事業における維持管理の新たな取り組みは，維持管理体制の安定的確保・充実，路線毎の維持管理企業の明確化による責任ある管理の実現，雇用確保等の効果が期待できる．

一方，企業側からは，①ロット拡大により諸経費率が低下することでの契約額の縮減，②修繕リスクの役割分担が不明確，③発注者指示に基づく作業のため実施時期を選択できずに繁忙期と重複・契約額の未達，④季節的な業務量の偏りによる人員の余剰や人件費の負担増，⑤JV における幹事会社の負担増，等が課題として挙げられた．

キーワード　維持管理，リスク，包括委託，性能規定，複数年契約
連絡先　〒161-8575　東京都新宿区西落合 2-18-12　八千代エンジニヤリング（株）技術推進本部　ＴＥＬ03-6906-0664

（２）国外事例からの示唆

性能規定型維持管理契約のひとつである英国 MAC 方式では，以下のような仕組みにより上記課題を解決している．すなわち，①管理水準の性能規定化（業務の実施時期，実現方法は民間企業が決定），②日常管理業務と修繕投資業務を明確に区分し，業務内容に応じた対価の支払い方法の採用，③企業側の創意工夫によるコスト縮減額が官民双方にシェアされる仕組み（コスト縮減すると双方に利益が生まれる）の採用，④道路管理の改善提案を業務として委託（採択されれば一定額以下は自ら実施できる仕組み）などである．



図－１　調査結果の整理

４．まとめ

我が国においては，既に人口減少時代に入り，これまで整備してきた社会整備資本を的確に維持管理し，それらをこれからの我が国の経済や産業等を支える資源として活用することが重要である．そのためには維持管理市場を魅力のある産業として育てていくことが急務であり，そうしたビジネスモデルの構築が求められている．特に民間企業の努力による利益を適切に官民でシェアする仕組み，パートナーシップ醸成が重要である．

謝辞：本調査を実施するにあたり，ご協力くださいました受・発注者の皆様方に深謝申し上げます．